

災害時の救援活動から学んだもの 人としてのやさしさの実践——私たちのできること——

(日蓮宗現代宗教研究所嘱託)

石原 顕正

今年の夏は、異常気象と呼ぶことすら限界といえるほどの高温に見舞われた。六月の台風四号以来、日本列島に上陸した台風の数は一十個となり、そのたびに全国各地に風水害、土砂災害をもたらし、被害は拡大している。

次第に極大化していく自然の猛威は、予測や予想をはるかに超え、海外でも、最大級規模のハリケーンや洪水が猛威を振るい、地球規模での異変はあとをたたない。

一方、国内においても、長引く経済の不況、先行き不透明と言われる将来への不安は人心の荒廃を生み、現代社会は混沌とした深刻な社会状況に陥っている。

事件・事故が多発し、まさに追い討ちをかけるように、自然の猛威が人間社会に大きな被害をもたらさせている。

これは、近代における災害に対する脆弱さが進み、現実的にはテロの脅威以上に社会不安が起りかねない事態である。

「天災だ」、「人災だ」とする評論的意見が、とても空しく聞こえてくる。

いくら文明や科学技術が発達しても、私たち人間の暮らしは、自然の営みには決して逆らうことのできない事実を認めざるをえないのである。

かつて先進国のなかでも、最も安全な国といわれた日本の神話がいとも簡単に崩れた。身内、他人を問わず、人間

不信は現実の社会問題として計り知れない状況にある。いまや、自分だけが安全な日々を過ごす事が困難になつてきた。

それだけ、日常生活において不安や危険度が増していることになつた。

世間で何が起こつても他人事のように、「うちは大丈夫、自分には絶対ありえない」と思い込んでいませんか。

そんな気持ちの蓄積が、突然の被害を呼び込むことになるのかも知れない。

言い換えれば、「他の人々の不幸の上の繁栄は、やがて自分自らにも影響が及ぶ」ということを考えてみる必要があるのではないだろうか。

1 活動の原点 ―「野次馬からの出発」―

自分自身、寺に生まれ、多くの人々の悲しみや苦しみに接しながら、使命として、自らをとりまく社会の現実に積極的に関わることに自負さえ感じていた。

多くの日常的法要儀式による人の生死に関わる場面はあつても、司祭する立場、喪主遺族の立場であり、対面の場での言葉の慰めや励ましはあつても、その場を過ぎれば儀礼的にならざるをえなかつた。

日常の宗教活動においても、社会のさまざまなニーズに対し、その呼びかけに応ずることはあつたが、寺院としてあるいは僧侶としての立場のみに始終した。いくら「地域に開かれた寺院」をめざしたつもりでも、世間の視線はやはり法要儀式を中心とした供養の場としての域を越える事はなかつた。

幸いに、個人的にもこれまでの人生の中で、大きな危険に直面したり、悲惨な現実を体験することはほとんどな

かった。

一九九五年一月十七日までは……

午前五時四十六分、阪神淡路大震災発生。

地震発生以来、昼夜を問わず、ひっきりなしに飛び込んでくる映像や活字。次第に拡大していく被害。近代都市の崩壊、人々の悲惨な姿にただ驚きながらも、終日テレビの画面から片時も目を離すことができなかった。日蓮宗寺院も大きな被害を受けているとの情報が入り、連絡をとるも通信不可能の状態。かつて経験したことのない事態が起きていることを認識しながらも、なすすべのない自分自身へのいらだちがつのるばかりであった。

取るものもとりにあえず、乏しい知識によつて用意した物資を背負つて、ただ神戸に向かった。まさに怖いもの見たさ、好奇心いっぱい『野次馬的』出発であった。

遺体への読経回向も、限られた炊き出しも虚しかった。

暖かい食べ物も、心の傷を癒せるものではないことを痛感した。

遺族・生き残った被災者の悲惨さは、決して言葉として語られることはなかった。

その後、改めて救援活動から自立支援、復興事業を手がける。被災地の人々の生活再建、自立へのプロセスは悪戦苦闘の日々であった。

被災地の人々との関わりの中で学んだものとは何か。

まず、言葉で何を言っても意味をなさない。何が必要なのか、どうしてほしいのか聞き取るすべがない。被災した人々にとって生きることや生き続けることの意味よりも、いかに失ったものが大きいかを改めて肌で感じることができた。

被害による「不幸」は決して元に戻らないという現実。
多くのものを失った喪失感は、心の傷はどうすればいいのか。

仮設に移ってから、せつかく助かった命を自ら絶つ人、寒さに持病が悪化して亡くなる人、栄養失調で一人寂しく息を引き取る人を目の当たりにして、同じ人間として「生きることの意味」を問う毎日であった。

そんな時、神戸市中央区ポートアイランド第三仮設住宅に安田秋成という人がいることを知った。

「こんなこつちあかん、仮設は生きるとこや。みんな一緒に仮設を出ような」
七十歳を越えた安田氏は病弱な奥さんを抱えながら、多くの被災者の生存権を主張し、生活再建への先頭に立つた。

―震災は…、ある意味で私たちから虚飾を取り去り、

改めて、生きることの原点を教えてください―

彼のこの言葉にすべてが尽きると思う。被災者も我々外部の人間も、すべてが同じ思いで、共に生きようとしなけ

れば、明日への希望すら考えられない状態であった。

「生きること」「生きつづける」ことの難しさは、お互いに決して言葉で表現されるべきものではなかった。

「生き残ったことが」無念であり、「生き続けることを」罪悪とも感じている人々を前に、慰めも励ましも意味をなさない。その後の各被災地でもこのような住民同士のサポートシステムは生活再建への重要な要因となり、日頃の防災意識の必要性を痛感することになる。

2 本当に人はやさしくなれるのか

わが国も、敗戦から要援護者が増加した。国民の多くが貧困となり、「救貧」政策が進む中で、社会は問題の解決として福祉化社会の到来を叫び、願っていた。高度成長の時代に入ると、「保険」「年金」政策が生まれ、現実的には市民の生活上の困難や障害が優先され、各法制化施策が進んだ。

これらのことにより、一見「やさしさの社会的実現」のように感じられるものの、そこにある種の権利が発生する。「当然のことのように」「うけるのは当たり前」という意識が芽生え、新たな障害となっていた事も事実である。

家庭、地域においても、親族・近隣の濃密な人間関係が喪失され、核家族によるプライバシーを高める一方で、孤立化を深めている。

あらゆる思考は個人の判断にまかされ、人間同士の知恵や経験が互いに活かされることは少なく、適時に対処することができない。「プライバシー」という言葉の意識が、日本文化を硬直させているように感じられる。

もし、何か問題が起これば、日本では「火消しの対処」。現状が充たされればよい。言い換えれば「今」がよけれ

ばいいという考えは、昔から続いていた。予防的見地、過去の教訓を学ぶことがとても苦手。過去や類似する事態に対する分析・検討をしない。外国の場合においては、同一宗教・民族同士の団結意識がみられ、相互援助も、日常生活の日課の一つとして特別なことではないと捉えている。日本の場合では、他者のため社会のために、自らの仕事や生活のスタイルを換えることは少ないと思われる。

さらに言葉の上で理解していても、多くの場面に遭遇すると、人間はなかなか行動できないものである。時には気持ちのどこかで無視したり、知らん顔をしてしまったことはないだろうか。

かつて日本は高度成長の時代に、他人のことより自分自身の人生目標が関心の中心であったことを忘れてはならないのである。

3 災害の時代

八十二年前、関東大震災のマグニチュード7・9という地震は自然がもたらしたものだが、橋や家屋が類焼している「地震後火災」に弱い下町の街並みを作ったのは、人間であった。天災・人災を問わず、壊滅的危機的状况において、国家権力の無限の極大化、住民の思考停止、わずかな飛語流言により発動される残虐性が当時の時代背景として存在したのである。

暗黒といわれた軍国主義の絶望的時代とは違い、戦後の災害の中で、被災者の悲しみに寄り添い、絶望の底から人間社会への信頼が芽生えるような災害救援であっただろうか。災害に遭ったことの不運を強調するだけでなく、災害への対応のなかに、その時代の社会の歪みを認識できたであろうか。

時代は経過し、経済至上主義に貫かれた今日の対応にも、これらの時代背景や社会の在り方が大きく関わっていたことに、目をそらしてはならない。

戦後においては、過去の死者の数では、一九五九年伊勢湾台風による四千六百名の犠牲があつたが、この半世紀、戦争はなく、国民全体が死と直面することはなかった。

高度経済成長を遂げ、世界第二位を誇っていた。道路・橋梁・鉄道・空港・港湾施設・河川の改修など主たる公共工事は展開し、安全で豊かな社会を快適に生きていると思ひ込んでいた。

そのために、この安全が当たり前になった社会で、何かの理由により（事故・災害・あるいは事件等）巻き込まれ、犠牲になることは、「個人のリスク・危険性」であり、あまり社会全体の不幸とは捉えきれないような気がする。

情報化社会の普及により、大量な映像や活字が家庭に居乍らにして飛び込んでくる。それを目にした私たちは、すべてを把握し、現実を認識したように思ひ込んでしまう危険がある。被災状態が総括的に報道されると同時に、実際の被災者一人ひとりの不幸や現実は映像からこぼれ落ち、孤立化していく傾向にある。

報道を見ている側、つまり被災地以外の外部社会の多くは日常であり、文明や科学の発達により、「自ら危険な目にあつたり、傷つけられることすら」全く想像できない。近代都市にあつては、自然の厳しさや恵みさえも日常生活には感じられることは少ないのである。

次第に、他人の困難は世間の出来事として、さらに一瞬の出来事は時間の経過とともに記憶から忘れ去られていくことになる。

4 災害の構造

阪神の震災前後、特にそれ以降、頻発する自然災害。社会においても凶悪な事件、テロへの恐怖が日常化されてきた。ある意味では、「災害の時代」になりつつあると認識していた。人間に対する「危険」について考えてみると、自然災害、人為的災害、さらには戦争も時代の災害として捉えてみたいと思う。

現場や当事者はさまざまに被害、影響の連鎖を繰り返し、直接の犠牲者をつくる。生き残った者（サヴァイヴァー）と遺族を残し、多くの被災者となる。

そして外部社会は、救援者とマスコミを送り込み、被災者に対して「被災者の役割」を求めていく。

災害の人為的連鎖、取り巻く外部社会の変化、被災者の個別化のなかで、救助・救援の形態は身体的救助と物質的救助に限定されてきた。

効率重視、目に見えるもの。大量の物資は現代文明の本流である。

負傷者の救出、搬送・高度医療への手立て。

被災者に毛布や水・食料を届け、二次災害防止のために避難所に誘導する。

同時に遺体収容は最優先される。

親族が安否確認のための通信回線の確保が急がれる。

災害によって粉々になった生活の秩序を、もう一度生きるための意味を発見することによって再構築されなければならないのである。

もし生きる意味が見出せない場合、自らの命がたとえ助かったとしても、自己破壊に向かっているのである。

神戸の震災後、耐え難い心的障害や生活のめどがたたずに、離婚、転職、アルコール依存症、交通事故、自殺など多くの悲劇を繰り返していった。

緊急の外傷への手当と物質的支援は、被災者が再び立ち直る気持ちが芽生えてこそ、意味をもつのではないだろうか。

かつて、医療では身体的医療が中心であり、被災者は災害の影響により日増しに不眠、頭痛、不安を訴えるようになっていった。

持病の高血圧や糖尿など慢性疾患等、災害時の精神医学的な取り組みは、ほとんど行われずに、個人的問題として、時が勝手に癒すものくらいに、取り上げられることはなかった。

北海道南西地震は、奥尻島青苗地区を襲った。壊滅した集落、二百人を超える死者、行方不明者は大津波と火災の映像にあおられて、外部の人々を刺激した。

短期決戦に挑むマスコミが小さな島に殺到し、被害の強調が外部の同情心を高めた。五千トンを超える救援物資、百八十億円といわれる巨額の義援金が集まった。

最善の被災者とはどんな人達なのだろうか。不幸にして災害に遭ったが、そのことによつて経済的支援を多く受けられた被災者なのだろうか。そんな疑問を感じていた。

奥尻の限定された地域。被災では、百九十八人の死者、二十六人の行方不明者を出しながら、遺族同士で故人の死を悼み、悲しみを癒し、困難さを分け合う動きが極めて少ない。外部からの励ましと、再建への取り組みだけが強調

される。公私問わず、カネ・モノが投下された。

一年後、日潮寺の三田住職が、「無法地帯になりました。いまさら何を言っても無駄です」と語られたことで、被災地社会での問題点を知ることができた。巨額な義援金によって、さらにある人は、被災者の多くがその金に群り、「災害病になった」という。

再建についても、「生活再建」ということはどういうことか、被災者自身が深く考えるための条件を、救援にかかわる側が作らなかった結果であると分析される。

このような事態を見るにつけ、日本の救援について考え直さなければならぬことがあまりにも多いことに気がついた。

さらに分析していくと、遺族や被災者は、十分に悲しむ時間や余裕すら与えられなかった。当初から、部外者は励まし続け、再建の言葉に酔っていた。

衣服や義援金は送ったが、災害で家族を失ったり、大きな痛手に傷ついた人々の心の傷を理解しようとはしなかった。カネは送っても、気持ちを送ることは考えなかったのである。

5 「市民参加型のネットワークを構築するため」 Earth創設への道

これまで全国各被災地での支援活動で学んだことは、まず救援活動の初期段階として、発災から速やかに現場での被災地の状況調査と分析に着手することにより、「具体的支援プログラム」を組み立てることが可能となる。

その上で、現地活動拠点を確保し、人員の衣食住、物資の保管、情報収集・蓄積が可能となる。

一方、後方支援の拠点(支援本部)では、常に現場の活動状況のすべてを把握しながら、冷静な判断と指示を求められる。

被災地は非日常であり、現場に入ると、誰もが気持ちの高揚は避けられず、己れの行動に酔いしれ、收拾できない危険が伴うためである。現地と後方支援との綿密な連携体制が確立されてこそ、初めて腰をすえた支援が始まるのである。

このようにして、被災地の人々に気持ちを送るためには、創意工夫が不可欠であり、被災者への理解や相手の気持ちを聞き取る配慮が必要である。

被災者を理解するということは、わが身に置き換え、自分に何ができて何ができないかを考えなくてはならない。

一時の同情や涙ではなく、被災者との労多いコミュニケーションが求められる。

被災地の人々は、さまざまな困難を抱えていた。すべて被災者という「マス」で集団的に扱うことが、当事者にとってどんなに辛いことか、まず第一に私たちは理解することが必要である。

被災者という集団として扱われることによつて、一人一人の困難や心の叫びは心の奥に押し込められ、表にあらわれることはない。そうした困難を抱えた人々を前に、私たち宗教者が、気持ちを伝えながら、時間をかけて心の内を読み取る手立てを考えなくてはならないのではないか。

最近、避難所でも、早い時期から看護師、保健婦など医療関係者が中心に交代で常駐し、「こころのケア」をおこなっているのだが、それでもまだ、支援者としての一方的立場からの視点での対応が多く見られる。

「どこか具合が悪くありませんか」「何か困ったことはありませんか」との問いかけに、深い悲しみや大きな不安を口にする人はほとんどみられない。

災害によって傷ついた人とそうではない人との気持ちは、簡単には埋められるものではないことを痛切に感じている。

さらには、限界や不可能を乗り越え、可能にするための思いが必要であろう。

被災者にとって、再建とは元（旧）に戻ることはない。

遺族にとって、喪った家族は絶対に戻らない。現実の不幸から立ち直るためには、理想がなければならない。災害に遭ってしまったが、人と人が寄り添い、絆によって、人間同士や社会への信頼、信じられる思いが不可欠となるだろう。

救援者が送ることのできる「最高の贈り物」とは、そんな思いではないだろうか。

「被災者は決して弱者ではなかった」ということは、阪神以後多くの被災地でも学ぶことができた。

被災者と支援者のそれぞれの立場を取り払い、同じ人間同士として「付き合い始める」ことが、本当の支援への第一歩といえるのではないか。外部からはモノ・カネは多く寄せられるが、義援金で元にもどるものがある反面、思いはまかなえないのである。

どうしたら多くの人々に被災者の気持ちを理解し、人としての「やさしさ」を提供してもらえることができるだろうか。一人一人の人間の力には限界があるが、多くの善意が集まれば大きな支えや力にもなれることを願い、報道では伝えきれない被災地の現実を外部社会に発信しながら、賛同される個人の限られた時間と労力を繋ぎあわせ、継続した支援を可能にするための「市民参加型のネットワーク」を構築していくのである。

以下、私の思いと同様な内容の類似文献に出会ったので紹介してみましよう。

とかく支援者は「支援・再建」の言葉に酔っていた。

哀れな被災者像への衣類の支援、義援金を送ったが人の心の傷を癒したか。被災者との対等な理解への努力↓何ができて、何ができないかを考える。

立ち直るための時間と付き合う思いが不可欠↓人と人との絆ではないか。

災害現場にマスコミを先頭に救命救急グループ、消防、警察、行政、さらに援助に多くの人々が押し掛けてくる。

これら救援者は、自らの役割をはっきりと持っている。彼らは迷うことなく「救援者役割」をとることができる。

被災者にはなお個別的事情が残っていても、救援者側にはない。災害の救援者は個別ではなく、集団ないし集団のメンバーである。

救援者役割を担った人々は、被災者を「災害で酷い目にあつた可哀想な（不幸）人々」として集合的にとらえる。

救援者が被災者をひとつのマスとしてとらえ、被災者集団に公平に何かを『してあげる』という関係をとればとるほど、被災者個々は無力化し、「被災者役割」に押し込まれていくという関係になる。

人間がそれぞれの個別事情を剥奪され、「してあげる人」と「してあげる人」に役割が分離されていくと、どうなるか。

社会学ではそれを施設と呼んできた。

正確には「全制的施設」（トータル インステイテューション）

建物や交通の破壊およびその復旧についてではなく、あくまでそこに生きる人々から目をそらさずに見ていけば、被災地全体としての施設に似てくるのではないだろうか。

各被災地現場では「施設」は存在した。避難所・仮設住宅などがそれである。

当初不足するだろう第一は水と食料であろう、と限定的に強調され、個別の不安、疲れ、要求は取り上げられなかった。そして応急の冷たいおにぎりなど「無理強い食事」が当然とされた。

外部からの大量な物資衣類（中には古着もある）が救援物資として送られてくるが、それは被災者の身体にあわず、それを身に付けることは被災者に自分たちの現状（自分たちは被災者であって、それ以外のなものでもない）を確認させることにつながる。次第に外部社会からボランティアなどが入って、食料配分の時間が固定され、被災者が従順に受け取っていくようになっていく…。次第に社会が分離していく。

これらの出来事は避けられるものもあれば、被災直後のためにさしあたって止む終えないことかもしれないが、「それぞれの側は他の側のためにある」という構造においては、今後も常に起こる可能性がある。

避難所および被災地は恒久的なものではない。こうした施設はなるべく早く解消に向かうべきものである。しかし支援者が無自覚に頑張れば頑張るほど、被災者は受け身となり、「それぞれの側は他の側のためにある」という関係は固定される。

つまり、避難所はいつまでも続き、仮設住宅も仮設のまま長く残るのである。

被災によるショック、コミュニティ感情の高揚期までは、どんな被災地でも共通する過程だが、それが被災地社会

への連帯感の持続につながるのか。怒りや不信を経て個別利害に向かつていくのかは、被災者を取りまく救援者（マスコミ、行政、ボランティア外部社会）の側の構えによつて変化するであろう。

災害直後の救命救急の時期においては、救援者は被災者をマスとして捉え、合理的に対応しなければならぬだろうが、緊急、火災防止の時期が過ぎれば、なるべく早く、マスとしての被災者のなかに個々の人間の顔を見いだす努力をするべきであろう。ソーシャルワーク的観点をもつて当初から臨むことが肝心である。

第一に

プログラムを被災者の精神的配慮の視点で組み立てる

被災者の再生能力を尊重し、自らの自己決定にむかつて支援することの大切さ

第二に

外部から被災地社会に加わりたいと思う場合には

被災者との顔の見える交流と支援を考えることの大切さ

第三に

支援の目標「支援のための快感」ではなく

最終目標は、被災者にとっての人間社会への信頼の回復・被災者自身による

新しくよみがえる地域社会のイメージ形成

当初から組織の体力にあわせ、引き際を見据えて取り組む必要性
自己中心の考え方や行動により無責任な事態を引き起こさないように

以上、『災害救援』岩波新書より

現状回復への効率の重視、形や見えるモノへのこだわりは、現代文明の本流といわざるをえない。しかし宗教的立場からは、何よりも体系化された救済の理念(癒しと救いの手立て)と実践が確立されなければ、何よりも被災者にとって粉々になった生活の秩序を取り戻すことの意味を理解することにはならないでしょう。

一人の人間として、全国各地の被災者の人々と向き合い、共に生きることの意味を求め続けながら、「する人」と「される人」の関係が問い直されていくことを願っております。